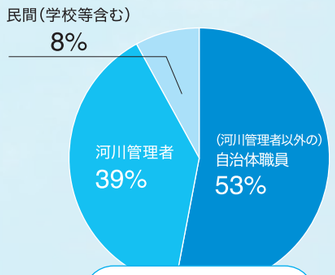
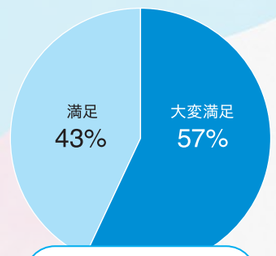
参加者アンケート

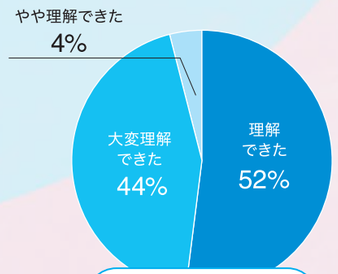
学んでつながって、うごきはじめた水辺の未来



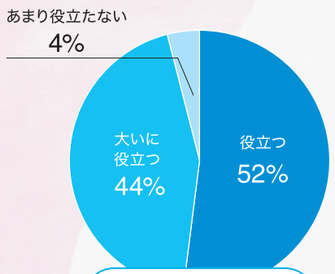
参加者プロフィール



満足度



理解度



役立ち度

参加者のご意見

自転車で川沿いを回り、
魅力的な観光地を併せて
回れるコースの整備を工夫しており、
自分自身も自転車で回りたくなるような
サイクリングコースを紹介していただいて、
当市で導入する上での参考になりました。

（京都府・河川管理者）

グループ分けした
少人数の会議が良かった。
WEBでも意見交換することが出来た。
リアル会議になっても
WEB会議は続けてほしいです。

（大阪府・自治体職員）

少人数で話せた
井戸端会議は有意義でした。

（静岡県・河川管理者）

全国の取り組み事例を
ご説明頂き大変参考になった。

（大阪府・民間）

ミズベリング第一線の方の
話が聞けてよかった。
また、国、府、民間の方と同じステージで
顔を見ながら話せることの
意義は大きいと思う。

（大阪府・自治体職員）

初めて参加させていただいたので、
正直内容についていけるか不安もありましたが、
皆さんのお話がとても分かりやすく
本当に勉強になりました。
持っている資源や環境が違う
それぞれの自治体の取り組みや
民間事業者の取り組み、
民間と行政が連携した取り組み、
とさまざまな事例を知れて良かったです。

（大阪府・自治体職員）

参加させてもらったきっかけは、
軽い気持ちでしたが、
参加して本当によかったと
思えるものでした。

（滋賀県・自治体職員）

民間の考えていることも含めて、
話しをきけたことは、
刺激になった。

（三重県・河川管理者）

ミズベリングに関するお問い合わせ ＞ MAIL:kkr-kasenmizube@mlit.go.jp

「ミズベスクール」最新情報は公式facebookページをチェック！
https://www.facebook.com/mizubeschool/

「いいね！」を
押して
参加しよう！

主催：国土交通省 近畿地方整備局

THINK RIVER　MIZBERING ミズベリング

ミズベスクール4
MIZUBE SCHOOL 4

REPORT

2021.1.29
オンライン開催

水辺を疎遠な場所から、もっと楽しい場所に。

ミズベリングは、官民一体で水辺とまちが一体となった景観をつくり、
にぎわいのムーブメントを起こすことで地域の活性化を目指すプロジェクト。
一人の力ではできない水辺のにぎわいづくりを、
ミズベスクールでは立場を越えて思いを語らい、膨らませ、
その道筋をカタチにします。
今回のキーワードは、ミズベ×サイクリング。
ウィズコロナ時代の移動手段やアクティビティとして、サイクリングが注目を集めています。
サイクリングロードは川辺や湖沿いにあるケースが多く、
水辺とサイクリングは切り離せない関係。
二つがいっしょに盛り上がる未来のつくり方を考えました。

PROGRAM

10:00		開会挨拶
10:10	第一部	ミズベリングを知ろう、ミズベリングオリエンテーション ■ミズベリングプロジェクト ■かわまちづくり支援制度 ■水辺における官民連携
10:50	第二部	事例に学ぼう、ミズベケーススタディ ■美瑛川地区かわまちづくり～美瑛川・青い池サイクリングコース～ ■伊豆の国市かわまちづくり ■ビワイチ ■WAKAYAMA800
13:30	第三部	身近で語ろう、ミズベ井戸端会議
15:10	第四部	ミズベ×サイクリング、トークセッション
16:40		閉会挨拶、記念撮影
17:00		閉会

ミズベスクール4
MIZUBE SCHOOL 4

ミズベとサイクリングの可能性を、語り合いながら学ぶ一日

水辺の新たな活用を創造する「ミズベリング」や、水辺とサイクリングを生かしたまちづくりの事例などを、専門家や当事者が自身の経験談を交えて紹介しました。また、登壇者と参加者が水辺とサイクリングについて、意見を交わし合いました。初のオンライン開催でしたが、行政、民間、地域が垣根を越えて繋がり合い、水辺の新たな未来を感じる一日となりました。

開会

10:00 〜

開会挨拶

自転車活用推進法が施行され、サイクリングを生かした水辺の利活用が盛んになってきています。「ミズベ×サイクリング」をテーマに掲げ、ウィズコロナの時代にふさわしい水辺の在り方についてもぜひ一緒に考えていきましょう。

国土交通省
近畿地方整備局 河川部長
豊口 佳之

第一部

10:10 〜

ミズベリングを知ろう、ミズベリングオリエンテーション

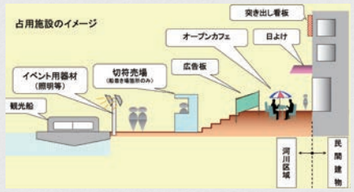
行政と民間が手を取り合い、水辺の未来をつくるミズベリング。
それぞれが境界を越えて、連携するために必要な取り組みやその支援制度をミズベリングのプロが紹介しました。

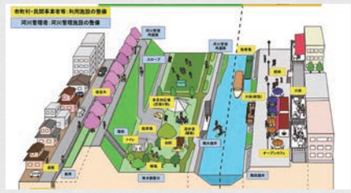
制度紹介01 ミズベリングプロジェクトについて

立場の違いを越境し、協働することで水辺をより良くする活動の輪を広げる

全国で水辺を利活用したい人を応援し、水辺の未来を模索する社会実験を積み重ねる中で、その経験やノウハウを共有し、水辺をより良いものに変える活動の輪を広げていく。それがミズベリングです。水辺の利活用には、個々人の意志が欠かせませんが、立場を越えて他者と協働しながら面白いことに取り組めるような能力も必要です。私たちはそれを「公共越境力」と呼び、その能力を身につけていくこともミズベリングの重要なテーマとして掲げています。

ミズベリング事務局
岩本 唯史 氏





制度紹介02 かわまちづくり支援制度について

水辺を生かし地域の価値を高めたい。その熱意に応えていく制度

市町村や河川管理者、民間事業者、地域住民が良好な関係を築き、河川と街の空間を融合させた賑わいをつくっていくことが「かわまちづくり」がめざしているものです。支援には、かわまちづくりのとっかかりや河川の占用許可に向けた支援を行うソフト施策と、かわまちづくりに関係する河川管理施設整備などのハード施策があり、両面から地域の価値を高める支援をしていきます。登録要件として重視しているのが「熱意」です。水辺を生かして賑わいをつくりたいという地域の熱い思いに、河川管理者も真剣に応えていきます。

国土交通省 近畿地方整備局
河川部 河川環境課 地域連携係
横守 伸彦

制度紹介03 水辺における官民連携について

中間支援組織をいかにデザインし、その機能を高めていくかが鍵となる

官民連携を考えるとき、市民と行政、あるいは企業と行政が二項対立になってしまうのではなく、3者および全てのステークホルダーが協働し進めていくためには、中間支援組織の存在がとても重要です。これを地域によって、いかにデザインし、展開していくかが、まちづくりを成功させる秘訣だと思います。そこで、まず行うべきことは大きなビジョンをつくることであり、それを共有しながら小さな社会実験を通して協働関係を築いていくことです。この積み重ねこそが、中間支援組織の機能を高めていきます。

株式会社E-DESIGN
忽那 裕樹 氏

参加者からの質疑応答

Q かわまちづくり支援制度の「ソフト施策」は、市町村や民間事業者が行う施策や事業のことを指すのでしょうか？

横守 ソフト施策とは、河川管理者が行う施策のことになります。例えばオープンカフェの設置などで河川空間を占用する場合、区域の指定を受ける必要があり、その指定を受けられるように助言や支援を行います。

Q コロナ禍における社会実験の事例などはありますか？

忽那 2020年度開催の「ヨガ祭」では事業者と入念に打ち合わせを行い、距離を取る形で実施しました。密を避けるために登録制を導入した草津川跡地公園の事例もあります。状況に合わせてオープンスペースのメリットを生かし、使いこなすことが大事と思います。

Q 中間支援組織は、官民の間のコーディネーターのようなものだと考えていますが、その立ち上げが一番難しいのではないでしょうか？

忽那 組織づくりから始めると上手くいかないので、社会実験となる小さな活動から始めるべきです。その活動の中で自然とコーディネーターとなる人が現れるのがいい状況であり、行政側がそのコーディネーターに権限を与えることが重要です。

Q 中之島川辺空間のハード整備について、全体的な管理者と仕組みはありますか？

忽那 大阪市と大阪府が管理する河川空間があり、それぞれに違いがあるなかで、中間支援組織への提案を徐々に形づくっていきました。河川空間の違いを乗り越え、大阪市と大阪府、さらに国がひとつのパブリックな空間をつくっていったというのは大きなチャレンジだったと思います。

Q 岩本さんは、ミズベリングのきっかけづくりをされていると思います。また、取り組んだ活動を人に知ってもらうためのPR機能もしっかりされています。そのあたりのご意見をいただけないでしょうか。

若本 意志を持っている人が集まっても、その人たちが連携できるようにならないと、互いに応援するような状況は生まれません。ただ単純に一般の方々にPRするのではなく、意志を持つ人たちの状況をひと段階上げ、連携できるようなプラットフォームをつくっていくことが大切だと考えています。

第二部

10:50 ～

事例に学ぼう、ミズベケーススタディ

「学ぶ」は「真似る」から。成功のカギを見つけて、行動を起こそう

水辺やサイクリングを生かして、地域を盛り上げるにはどうすればいいか。思いをカタチにするための秘訣は、実際の事例に隠されています。先進事例をその当事者から学び、明日への行動指針を見つけましょう。

CASE 01 北海道美瑛町

「美瑛川地区かわまちづくり～美瑛川・青い池サイクリングコース～」

官民連携のワーキンググループを重ねてつくり上げたサイクリングロード

美瑛町まちづくり推進課
課長
今瀧 毅 氏

美瑛町では、丘の上を自転車で駆け抜ける「美瑛センチュリーライド」の開催を契機に、サイクリストが増加していました。そんな中、観光資源が集中する「白金エリア」と「市街地の堤防」を活用し、様々な観光資源を有機的に結べないかという考えが生まれ、美瑛川・青い池サイクリングコースの計画が始まりました。

実現化に向けて取り組む中、ポイントになったのはワーキンググループです。観光協会、ペンションやカフェのオーナー、サイクリングクラブなどもメンバーとして参加し、全10回の意見交換や社会実験の場を設置。会議室の中だけでなく現地試走を楽しむなど、多彩なプログラムを設けたことで互いの距離が縮まり、まさに民間と行政という立場を越境できる場としての機能を果たしました。
何でも言い合える関係ができると、価値ある意見が続々と生まれます。例えば家族向けの取り組みが必要であるという意見から親子体験試走会も実施。パン作りや自然散策を組み込んだ試走会は満足度が高く、参加者からも様々な意見をもらい、看板、道路表記、景観などへの多くの気付きがありました。官民のタッグによる社会実験の積み重ねは、令和元年度全建賞の河川部門の受賞にもつながりました。

参加者からの質疑応答

Q 利用ターゲットはどのように設定されていますか。

A 「美瑛センチュリーライド」に参加されている方や、健康づくりに取り組む町民などをターゲットにPRを行いました。

Q 勾配がある地域もありますが、参加された子どもはどのような様子でしたか。

A 親子体験試走会では、小学校高学年であれば大丈夫な印象でした。小学校低学年は青い池から市街地へ下っていくコースが良いと感じました。

Q 誘導ラインの維持管理はどうされていますか？ラインが消えるなど、維持管理に課題を感じています。

A コースができたばかりなのですが、維持管理については北海道開発局や国と協議を行っているところです。役割分担を事前に整理していく必要があると思っています。

Q 社会実験におけるサイクルポートの設置は、お店への支給になるのでしょうか。あるいは補助でしょうか。

A サイクリストをターゲットにしたカフェなどでは、お店にあったものを活用させていただくこともありましたが、基本的には公の財産として設置させていただきました。

CASE 02 静岡県伊豆の国市

「伊豆の国市かわまちづくり」

行政の手厚い支援で実った地域密着型のオフロードコース

メリダジャパン株式会社
ブランドマネジメント部
MERIDA X BASE MANAGER
品川 真寛 氏

自転車メーカーのメリダジャパンは、世界最大規模の展示場「MERIDA X BASE」を運営し、その近辺にマウンテンバイクなどを気軽に楽しめる「オフロードコース」をつくろうと模索していました。オフロードコースを整備するにあたり、土地の所有者や地域の方々、行政からどのような形で理解を得るのかという大きなネックがあります。それを乗り越えるためには、一番身近な行政といえる市町村と連携を取りながら道筋を整えることが重要です。

今回のプロジェクトでは、伊豆の国市の民間への柔軟な理解や精力的なご支援のおかげで、それが可能になりました。河川敷活用のご提案はもちろん、伊豆の国市が他の行政や地元企業と私たちの活動との懸け橋になってくださったことが、今回のコース整備の大きな要だと実感しています。例えば、市を通して私たちの活動を国土交通省にPRすることで、狩野川の改修工事が行われました。また、地元の企業やスポーツチームなどを紹介していただき、ロードレースチーム「レバンテフジ静岡」の選手との交流や、狩野川漁協提供の鮎の塩焼きをふるまう、県内向けのイベントを開催することができました。今後も競技大会の運営やジュニア選手の育成などを伊豆の国市との二人三脚で取り組んでいきます。

参加者からの質疑応答

Q 行政連携における課題を教えてください。

A 伊豆の国市の方は、国土交通省とのパイプ役になってくださるなど、色々な面で本当に良くしていただいています。こういった活動では、行政との連携が重要になってくると実感しています。

Q どのような地域貢献を求めていますか。

A オフロード自転車に乗りたい、自転車に乗れるようになりたい子どもたちの支援に力を入れていきたいです。クローズドのコースは車などの接触事故のリスクもなく、ハードルが低いと思います。

Q 河川占用料は発生していますか。

A 現在は、伊豆の国市から使用許可をいただいている形ですので、金銭は発生していません。

Q 河川の増水で大きな労力がかかりませんか。

A 台風などの影響で、大型のゴミが流れついたり、コースが変形したり、整備は必要になると思っています。

Q 地域のサイクリング利用者数は把握していますか。

A 利用者数を具体的な数字にしていませんが、徐々に増えてきていると思います。河川敷の自転車道が整備されていることも、利用者増加のひとつの理由ではないかと感じています。

第二部
10:50 ～

事例に学ぼう、ミズベケーススタディ
自転車を活用した先進事例から水辺のにぎわいづくりのノウハウを学ぶ

CASE 03 滋賀県守山市
「ビワイチ」

地域を超えた連携と持ち味を活かした立ち位置

守山市
総合政策部 地域振興課
主任技師
高山 尚道 氏

滋賀県の中で守山市は観光面では著名な街とは言えず、琵琶湖を背景とした観光資源をいかに活用するのかは大きな課題です。そこで、守山市では、琵琶湖一周（ビワイチ）のスタート地点という持ち味を活かし、他の地域と張り合うのではなく、「琵琶湖周辺地域との連携」と「他のサイクリングスポットとの広域連携」の2点を軸としたまちづくりをスタートさせました。

守山市の琵琶湖大橋からスタートし、琵琶湖や賤ヶ岳などの豊かな自然、メタセコイアの並木、白髭神社などを楽しみながら一周するのが「ビワイチ」の定番コースです。サイクリングロードを活かしたまちづくりの先駆者である愛媛県今治市（しまなみ海道）の先例に習い、コースのスタート地点となるサイクルステーションを設立。守山市が主体となって、県や漁業組合、台湾の自転車メーカーなどの協力と理解を得て、走行環境の整備やアクセス手法等に関してさまざまな試みを展開、サイクリング関係のツアー企画や関連イベントも積極的に開催してきました。また、2018年には「自転車を活用したまちづくりを推進する全国市区町村長の会」が発足し、地域を跨いでのイベントやPR活動にも力を入れています。このような地道な努力が実を結び、目標に掲げていた「しまなみ海道サイクリングロード」と同様に「ビワイチ」も日本を代表するナショナルサイクルルートに認定されました。

参加者からの質疑応答

Q サイクリングと関連したまちづくりについて教えてください。
A びわ湖守山・自転車新文化推進協議会では、市民が主体となり、サイクリングや、市民向けのスタンプラリーなどの企画を展開しています。

Q 琵琶湖一周で、地域外をPRすることに抵抗はありませんか。
A 守山市は、スタート地点としての機能を発揮する街というポジションを選び、確立してきました。県はもちろん、コース上の全地域との連携を大切にしています。

Q 年間にどれくらい事故が発生していますか。
A 多くはありませんが、琵琶湖大橋で歩行者との衝突事故が発生しています。湖岸道路も改良中ですので、走りにくい面はあるかと思いますが、走行環境は良くなっています。

Q ポタリングユーザー、ライトユーザーへの訴求は考えていますか。
A ヘビーユーザーだけでなく、初心者の方にも楽しんでほしいので、案内の充実や、野洲川を身近に楽しめるような環境を整えていきます。

Q サイクリストの推計はどのように算定していますか。
A 交通量調査や、お店の自転車の貸し出し数、定点観測などの推計をまとめています。

CASE 04 和歌山県
「WAKAYAMA800」

民間の方との協働で、サイクリストに「無限大∞」の楽しみ方を提案

和歌山県 企画部
地域振興局 地域政策課 主査
布居 怜 氏

和歌山県 商工観光労働部
観光局 観光振興課 副主査
北出 雅也 氏

和歌山県では、「海」「山」「川」の変化に富んだ県下全域800kmにもおよぶ日本最大規模のサイクリングロードを整備したことをきっかけに、「WAKAYAMA800」としてサイクリストの方を中心に「無限大∞」の楽しみ方や地域の情報を発信し、県下全域の周遊促進を図る取組みが始まりました。

県内には、「WAKAYAMA800」のおすすめルートをはじめ、ナショナルサイクルルートの指定を目指す「太平洋岸自転車道」、自然に富んだたくさんのコースがあります。旅をするかのようにこうしたコースを楽しんでもらうためには、官民が一丸となって環境整備に取り組む必要がありました。そこで県では、サイクリストの受け入れ環境の整備について民間の方の協力を仰ぐとともに、サイクリングイベントや自転車専門誌をはじめとした広告を展開することで誘客を図ってきました。

その結果、県内のサイクルステーションは国内有数の300ヶ所。また、客室への自転車の持ち込みなどが可能な「サイクリストに優しい宿」には、65ヶ所が認定。パークアンドライドサイクル用の無料駐車場の提供や、レンタサイクルといった、様々なサービスが充実しているのは、民間の方の協力があってこそだと思っています。県内55ヶ所をめぐる「WAKAYAMA800モバイルスタンプラリー」では4,500人もの方に登録いただき、県内外に向けた活動の成果が着実に表れています。

参加者からの質疑応答

Q 民間での活動や、連携について教えてください。
A レンタサイクルや、サイクルステーションに関しては、設置のお願いや、取り組みの紹介などにおいて民間と連携しています。

Q 市民参画まちづくりの意見や、ユーザー目線をどのように反映していますか。
A 地元のサイクリングクラブや、サイクリング協会、JRなどに入っていただき、意見を地区ごとに聞ける機会をつくっています。

Q 無料駐車場に関するトラブルはありませんか。
A サイクリングの人が多すぎて、実際に施設を利用される方の車を停めるスペースがなくなってしまい、PR誌などに掲載できなくなったことがありました。

Q 和歌山県内において、サイクリングを広めていくきっかけは何でしたか？
A やはり、「しまなみ海道」の影響が大きいですね。

第三部

13:30 ～

身近で語ろう、ミズベ井戸端会議

まさに立場や組織を越境し、語り合う場。水辺の未来はここから生まれる

所属する組織や立場の違いを越えて、意見を交わすことが、水辺の新たな未来に繋がります。ミズベ井戸端会議では、参加者がグループに分かれて交流を深めるとともに、水辺のにぎわいづくりやミズベ×サイクリングに関わるテーマについて自由な語り合いを展開。オンラインであっても白熱したトークが繰り広げられました。

流れ

参加者が少人数のグループに分かれて、登壇者のテーマについて気になったことや詳しく知りたいことを質問しながら議論を進行。

さらに、テーマを受けて、自身の水辺に関わる取組みや、その課題・悩み、成功体験などを共有し、意見を交換します。

ミズベ×サイクリングについて、以下の3つのテーマからグループ内で語り合います。

1. ミズベリングとサイクリングは○○という点で共通点がある。
2. サイクリングでミズベリング的な成果を上げるためには、○○が必要である。
3. サイクリングで新しいチャレンジをするためには、ミズベリングの○○という視点が必要である。

登壇者は、前半と後半で別のグループに参加し、自身のテーマやミズベ×サイクリングについての意見交換を行います。

ミズベ井戸端会議、7つのルール

1. なるべく褒める。否定的な発言はしない。
2. 自分の話だけでなく、相手の話にも耳を傾けて。
3. 互いの成長を見守る視点を持つこと。
4. 特定の個人・団体の誹謗中傷はしない。
5. 参加者の見解は所属団体の公式見解としない。
6. 議論はフェアプレイの精神で行う。
7. 議論を進める際は実証的なデータを尊重する。

TALK THEME 01

地域の魅力創出における かわまちづくり支援制度の活用のこつ

近畿地方整備局
河川環境課
横守 伸彦

前半　既存のサイクルロードとつなげて広域連携を

それぞれ既存のサイクルロードをどのようにつなげていけば地域活性化に結びつくのかに注目する。一市町村を越えて、沿線自治体との連携のためには担当者同士の人と人とのつながりをまず構築していきたい。最初は実験的に小さなイベントを開催し、ニーズを確認しながら民間を巻き込んで地元からの要望を引き出していければ持続的なまちおこしが期待できる。水辺と街が離れている土地は、移動手段としてサイクリングを提唱するといい。

後半　サイクリングの主役はあくまでも地元と民間

行政がハードを整備し、民間がソフトを更新していく関係がかわまちづくりの理想。地元と民間が積極的にかかわることで、賑わいを継続していくことができる。水辺に人を呼び込むミズベリングと、水辺を継続的に活気ある場にしていくサイクリング。地元の特色を活かしながらかわまちを発展させていく。いずれの要素に取り組む場合でも、つくって終わりでなく持続していくために、民間に振り向いてもらう必要がある。

TALK THEME 02

水辺の魅力を創出し それを持続させる官民協働のこつ

株式会社 E-DESIGN
忽那 裕樹 氏

前半　仮設コンテナで実現するファンが集まる持続的イベント

恒久的まちおこしにはファンの存在が欠かせない。現場を整備してから集客を始めるのではなく、整備前から「意見を取り入れながら一緒につくりあげる場」にしていく。最初はコンテナひとつから、徐々にその存在や影響力を高めて認知させていくことで、行政にも受け入れられやすく、また民間が管理しやすいコンテンツとなっていく。ストーリーをつくり上げることで、ゲストをホストへ、その中からリーダーを育てていく。

後半　“ご近所さん”自治体同士が応援し合うまちおこし

今後はマイクロツーリズム的PRを取り入れた広域連携がカギとなる。2都市を結ぶサイクルロードの整備や、イベント主催地域を盛り上げるために沿線市町から応援に駆けつけるなど、地域それぞれの特色を活かした連携を意識していく。各行政の代表としてブランディングを仕切ってくれる民間リーダーを3カ年計画で育成していきたい。歴史がある街は予算獲得のきっかけになる「何周年」のカレンダーをチェックすることも重要。

TALK THEME 03

サイクリングを活かした 地域の魅力創出のこつ

美瑛町
まちづくり推進課
今瀧 毅 氏

前半　自転車の可能性を引き出す多職種連携

本格的なサイクリングのイメージに囚われることなく、宿泊・飲食・観光等の交流を通じて、自転車ツーリズムの可能性を広げていく。美瑛町ではワークショップに多様なメンバーを加え、実際のコースを走りながら「気持ちよくサイクリングができる環境づくり」を進めていった。「車ではもったいない」と感じるような街づくりがポイントとなる。川沿いとサイクリングの親和性の高さは、沿線の市町村の良好な関係を築くきっかけとなる。

後半　SNSから火が付いた一過性の人気で終わらせない工夫

サイクルロードゴールに位置する美瑛町の青い池が話題になってからは観光客数も増加した。駐車場や売店の整備を推し進めるとともに近隣の民泊や飲食店にも立ち寄れるようなサイクルロードを設計。街全体でサイクリングを歓迎するムードを盛り上げている。あえて車が入れない土地には「自転車の魅力」がウリになる。サイクリングを安全に、景色を味わいながら、目的地には商業コンテンツを設置するなどの工夫とPRを継続したい。

第三部

13:30 ～

身近で語ろう、ミズベ井戸端会議

まさに立場や組織を越境し、語り合う場。水辺の未来をここから生まれる

TALK THEME 04

企業からみる 水辺の賑わい創出参画の決め手

メリダジャパン株式会社
品川 真寛 氏

前半　地域の消費拡大には魅力的な目的地が必要不可欠

サイクリストのうち、道の駅などの拠点に車を止めサイクリングを楽しむ「パークアンドサイクル」のスタイルがかなりの割合を占めている。誘致したサイクリストを、観光や消費に繋げていく一番の近道は、美味しい飲食店や、バイクラックなどの設備が充実した施設など、魅力的なゴールを設置すること。また、雨天時に楽しめるアクティビティや、観光名所などのPRなども、地域や企業の利益につながる重要な取り組みである。

後半　地域を熟知した提案力で民間企業を支える

民間企業がかわまちづくりに参加する上で、行政に期待するのは金銭的なバックアップではない。河川と事業者を結びつける魅力的な提案や、参加へのハードルの低さ、問題解決のための細やかなサポートなどが求められている。また、事業を成功させるためには、使用する河川の特徴をはじめ、周辺環境や立地、交通量などの情報からターゲット層を見極め、事業者の利益を確保できるような独創性のある取り組みを共に考える必要がある。

TALK THEME 05

琵琶湖畔（ビワイチ）サイクルツーリズム・受入環境の整備

守山市
地域振興課
高山 尚道 氏

前半　立ち寄りたくなるための仕掛けづくりを

サイクリストの方々は走ることが目的で街や観光地には立ち寄ってくれない。サイクリストの心理や気質を研究し、ビュースポットなどの立ち寄りスポットや街に流入させるような仕掛けを創出すべきである。一方でファミリー層もサイクリングを楽しめるなど裾野を広げる努力も必要。趣味からレジャーまで幅広い楽しみ方ができるイメージを持ってもらえる地域をつくり、大阪府の調査によるサイクリストひとり当たりの地域への消費額（平均1,000円～2,000円）をあげていく。

後半　自治体の枠を越えたコース整備や魅力づくりが必要

自転車で走れるコースがあっても途切れていたり、整備されていなかったりすることが多い。サイクルロードは市町村あるいは府県を越えて線や輪でつながっているので、道路の整備はもちろん休憩や集合地点も、地域の枠を越えて連携しながら調整すべきである。サイクリストが地域に立ち寄り、その魅力に気づいてもらうためのビューポイントなどを考える上でも、お互いに地域の個性を理解し合い、ポイントのリンクやルート作成を行うとよい。

TALK THEME 06

ミズベリングのはじめ方、なかまの増やし方のこつ

ミズベリング事務局
岩本 唯史 氏

前半　全ては、ユーザーのニーズをくみ上げることからはじまる

ミズベリングを進める際にまず取り掛かるべきことは、潜在的なニーズと向き合うこと。水辺にはどんなニーズがあるのか。ボトムアップ型でくみ上げたさまざまなニーズを、組織運営に反映する仕組みづくりが重要となる。また、行政側の思いを上手く発信することも必要。行政で働く人間の意志は、外からは見えづらい。「私が水辺をもっと、素敵な場所に変えたいんだ」そんな思いを届けることが、民間や地域を巻き込む大きな要因となる。

後半　行政と民間がタッグを組み、ユーザーの自治意識を育む

今までの行政の取り組みは、何かを「作る」ことを前提としていたが、これからは、「どのように使ってもらうか」が問われる時代となっている。そのためには官民連携や、広域連携が必要不可欠で、ミズベリングは行政と民間の出会いや意見交換の機会としても使える。また、行政が得意なのはハード面の整備である一方、プロジェクトを発展させるためには、民間の方々やユーザーの自治意識を育むことも、非常に重要なポイントである。

TALK THEME 07

サイクリングルート利用促進施策

和歌山県
地域政策課
布居 怜 氏

和歌山県
観光振興課
北出 雅也 氏

前半　水辺には自転車からしか見えない景色がある

海沿い・川沿いは片方がクローズされた通りになっていることが多く、専用道として整備が比較的簡単というメリットがある。ここに自転車で観光することの手軽さと意外さをPRできるよう、珍しいビュースポット等を提案できれば、SNSの波に乗った拡散が期待できる。一発で大きな話題になるようにするよりも、地道なイベント開催で着実に集客力を上げていくことが大事。

後半　ターゲットとPRを的確に地元と協力しながらまちづくりを

県外からのサイクリング観光客を呼び込むために、自転車専門誌をはじめライフスタイル誌への広告を展開。また、一方で地元の飲食店などに空気入れを設置するなど、まち全体でサイクリストを受け入れる空気をつくっていくことが必要。観光客が増えるにしたがって、新しい協力者が現れてくる。5年計画など、長い目で見ながら地元の理解と協力を獲得していきたい。

第四部

15:10 〜

ミズベ×サイクリング、トークセッション

自由な意見交換から見えてきた、課題を乗り越えるためのヒント

ミズベ井戸端会議で話された内容を、それぞれのテーマを担当したファシリテーターが発表。

トークセッションでは、ミズベリングとサイクリングをさらに盛り上げていくためのヒントがたくさん生まれました。

ミズベ×サイクリング

MIZUBE × CYCLING

近年、サイクリングへの関心が高まり、多くの自治体がサイクリングを生かした水辺のにぎわいづくりに試行錯誤しています。その際の新たな気づきや課題、アイデアが第二部の先進事例や第三部の井戸端会議を通して、たくさん生まれました。第四部では、登壇者がそれらを受けて成功への道筋と、ミズベ×サイクリングの新たな可能性を模索しました。

登壇者発表の様子

ミズベリングは元々、河川にユーザーニーズがないものがつくられることを回避するために、スタートしたものといえます。行政がニーズをくみ上げながら、民間や地域の方々の自治意識を育むことが重要だという話をしました。また、ミズベリングは広域連携をすることが実はあまりできていなかったので、今後はサイクリングがきっかけで水辺の広域連携がすすむといいなと思います。

ミズベリング事務局　**岩本 唯史氏**

水辺の水位変動が激しいため、どのように整備をしていけばよいか、街と川が離れているため、どう繋げるべきかなど、かわまちづくりのさまざまな懸念や、その対策について話しました。また、ミズベリングとサイクリングの共通点として、何かを乗り越えていくような「アウトドア精神」、多くの人々とかかわるもの、広域連携が必要だという点があげられました。

近畿地方整備局 河川環境課　**横守 伸彦**

官民連携の悩みを共有しながら、どのように実行するかアイデアを出し合いました。大和川流域の方々が一堂に会して、繋がる場所をどのようにつくるかという話があり、凄くワクワクしました。（実は先ほどの会議で、事業が生まれました。）
自転車で街を楽しみながら巡れるネットワークを、地域を超えてつくっていく。そんなことができればと思いました。

株式会社E-DESIGN　**忽那 裕樹氏**

街を楽しむには自転車がちょうどいいスピードだということや、かわまち事業やサイクリングは市町村を跨る取り組みができ、境界を越えた魅力があるといったご意見をお聞きしました。また、プロジェクトを成功させるには、企業の力、ロケーション、商業コンテンツが重要だというキーワードもあげられました。

美瑛町 まちづくり推進課　**安藤 和也氏**

企業から見た水辺の可能性や、メリダが参画した決め手について、さまざまなご質問をいただきました。もともと、マウンテンバイクを初心者でも楽しめる場所を探しており、伊豆の国市さんに相談したことがきっかけでした。またミズベリングとサイクリングの共通点として、コアなユーザーでなくても、景観を楽しめるということがあげられました。

メリダジャパン株式会社　**品川 真寛氏**

自転車を楽しむ方はどんな傾向があるかという話題交換がありました。自転車を本格的に楽しむ方は、走ることに夢中になるので、私たちが感じていただきたい水辺の魅力が届きづらいのではということが、共通認識としてありました。逆に言えば、どのようなコンテンツがあれば、地域の魅力が届くかを考えることが、地域側の課題だと感じました。

守山市 地域振興課　**高山 尚道氏**

利用者目線・管理者目線いずれを重視してサイクリングロードを整備するか、PRをどのようにしていくかなど、悩みの共有がメインでした。また、広域連携の必要があるといった話をいただきました。広域連携には、協議会をつくる必要性がありますが、協議会づくりに力を使ってしまい、その後が上手くいかない可能性があるなどの悩みも寄せられました。

和歌山県 地域政策課　**布居 怜氏**　和歌山県 観光振興課　**北出 雅也氏**

TALK SESSION

水辺もサイクリングロードも、全てはまちづくりのために

岩本　和歌山県さんの、協議会をつくってから事務レベルの話を進めるというプロセスに、忽那さんが第一部で言っていた中間支援組織が入ってくると、どのように運営されるのでしょうか。また、ミズベリングもサイクリングも、行政と民間の創造的連携が大切かと思いますが、美瑛町さんの場合はどうでしたか。

忽那　協議会はどちらかというと保守的な方が多いので、もう少し活動を前提とする方と行政が意見交換できる場をつくることも必要です。協議会と連動してそのようなプラットフォームを動かし、参加者の自治意識を育む視点が重要です。

安藤　民間と行政でワーキンググループを立ち上げ、さまざまな意見交換を行いながら開発局と整備を進めました。小さい町ですので、知り合いが多く和気あいあいとしていました。しかし、広域連携となると、色んな組織がかかわるので大変になるかと思います。

岩本　今回、サイクリングとミズベリングの文化の違いを感じたことはありましたか？

忽那　守山市さんのグループのように、サイクリストは走ることが目的で、あまり買い物をされないという話が、私の方でもありました。サイクリングを主語にしてミズベリングを進めるのではなく、まちづくりにサイクリングをどう活かせるかという視点が重要だと思います。

品川　本格的なサイクリストほど、走ることだけを楽しむ傾向があります。ただ、初心者の方をふくめ、走っているとすぐにお腹が減るので、美味しい食事どころだったり、SNSに発信したくなるような綺麗な景観など、立ち寄れるスポットをアピールしていくと、お金を地域で使っていただくことに繋がるかと思います。

岩本　メリダさんも、ただ単に距離を走る人だけではなく、休憩しながら食事や景色を楽しむ方が増えることで、ユーザーが広がるとお考えになって、この仕事に取り組まれているということでしょうか。

品川　そうですね。ボリューム的には、これから自転車をはじめたいという潜在的なユーザーの方が圧倒的に多いので、きっかけをつくっていきたいです。我々だけでなく、自転車業界全体で、ユーザーの裾野を広げる必要があると感じています。

岩本　コアユーザーだけをターゲットに、自転車拠点をつくらなくてもいいということは、多くの団体が安心するかと思います。また、水辺ありき、自転車ありきでなく、「使ってくださる方が気持ちよく過ごせるように」という共通意識が必要です。そのためにも、ミズベリングは守山市さんの「ビワイチ」のような広域連携が重要だと考えています。

高山　ビワイチもそうですが、日本人的な気質なのか、「一周しなきゃ」という真面目な発想があるようです。しかし私は、琵琶湖のほとりで自転車を楽しんで、また来たいと思ってもらえる、逆にそれだけでいいんじゃないかと思っています。それに応える環境整備をどうするか、それが私たちの仕事だと感じています。

布居　一番初めに、公共越境力という話がありました。サイクリングは1つの自治体の中だけでおさまりません。ミズベスクールをきっかけに他の自治体とつながって、小さいことから始め、最終的に越境に繋がれたらと思います。

岩本　今日は、国土交通省の横守さんと一緒にこのプロジェクトを考え進めてきました。いろいろ感じたこともあったと思いますが、どうですか？

横守　ミズベリングの一番の理想は、人々の繋がりのきっかけになることです。さまざまな自治体の方や、メリダジャパンさんに来ていただき、色んな意見交換や共通認識を持っていただけたと思います。今回のミズベスクールが、サイクリングやミズベリングが広がるきっかけになればいいなと考えています。

ミズベ×サイクリングまとめ

- かわまちづくりにサイクリングをどう活かすかの視点が重要
- ボトムアップでユーザーニーズをくみ上げる
- 参加者の当事者意識や、自治意識を育む視点を持つ
- サイクリングロードは地域を越えて繋がっているので広域連携による環境整備や魅力づくりが欠かせない
- 立ち寄りスポットの情報が、サイクリングと地域活性を繋ぐ
- 行政と民間が自由に意見交換できる場をつくる
- コアユーザーに合わせるのではなく「使う方が気持ちよく過ごせる」という共通意識が重要

大切なのは、公共越境力

ミズベリングやサイクリングの取り組みは、1つの組織だけではおさまりません。
国・自治体・民間の境界を越える「公共越境力」を育み、繋がり合うことで、ミズベとサイクリングの未来が広がります。

閉会

16:40 〜

閉会挨拶

水辺とサイクリングの様々な事例や意見交換を通して、組織や地域を超えて連携することや、民間と行政を繋ぐプラットフォームをつくり小さな活動から始めることの重要性を学び、共有できたことは大きな成果です。今回の成果が皆さまの悩み解決につながる一歩になると確信しております。

国土交通省
近畿地方整備局
河川部 広域水管理官
佐久間 維美